



兵庫県埋蔵文化財情報

# ひょうごの遺跡

平成20年(2008)  
2月28日発行

66号

兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500 TEL079-437-5589 FAX079-437-5599  
ホームページアドレス <http://www.hyogo-c.ed.jp/~kokohaku-bo/>



## 平成19年度上半期の発掘調査



英賀保駅周辺遺跡第4地点

### 唐三彩が出土

兵庫県立考古博物館は平成17年度から姫路市苦編から町坪にかけて広がる英賀保駅周辺遺跡第4地点の調査を行っており、縄文時代から鎌倉時代にかけての集落跡が見つかっています。最終年度となる今年の調査でも弥生時代から鎌倉時代の遺構・遺物が検出されました。その中で、苦編地区から全国的に見ても例の少ない唐三彩の破片が出土しました。





唐三彩の破片は残念ながら特定の遺構から出土したものではなく、丘陵の東裾にたまった洪水によって運ばれてきた地層に含まれていました。通常、洪水による堆積層にはさまざまな時代の遺物が混じっていることがありますが、今回唐三彩が見つかった地層には奈良時代から平安時代前半のかなり限られた時期の遺物だけが含まれていました。また、その種類も円面硯、須恵器の蓋を硯として利用した転用硯、墨書土器（「中殿」等）、緑釉陶器、布目平瓦、石帯（丸軋）といった通常の集落跡では発見されないものが含まれています。

出土した唐三彩は、弁口瓶（べんこうへい）の長く伸びた頸部から口縁部の破片です。表面はかなり痛んでいて釉がほとんどはげ落ちているのですが、一部に茶色、緑色の釉薬が残っており、本来は茶・緑・白の三色に彩られていたと考えられます。

唐三彩を含む唐代の鉛釉陶器はこれまで国内で約70遺跡、兵庫県内でも2遺跡からの出土が報告されていますが、弁口瓶が遺跡から出土したのは全国でも初めてではないかと考えられます。

さて、この唐三彩はどのような経路を通して姫路までやってきたのでしょうか。現在、唐三彩を焼いた窯跡は河南省、陝西省、山西省、四川省、河北省などで見つかっています。今回出土した弁口瓶は奈良文化財研究所で見ていただいた結果、河南省黄冶窯の製品である可能性が高いようです。かつて唐の都や港の市で購入されたものが、遣唐使や遣唐使船の乗組員によって日本に持ち帰られたというところでしょうか。そして、最終的に今回の発見地点の近くで使われ、捨てられたものと考えられます。

最初にも述べましたが、唐三彩と同じ地層からでた遺物は役所跡あるいは寺院跡に特徴的なものが多く認められ、これまでの苦編地区の調査でも同様の遺物が見つかっています。また、姫路市教育委員会の調査で、唐三彩出土地点と丘陵を挟んでちょうど反対の位置には、風変わりな軒丸瓦や蓮華文埴、施釉陶器等が出土した山本廃寺（山所廃寺）があり、今回の調査成果と合わせて考えると夢前川右岸下流に一定の規模を持った古代寺院・役所跡が営まれた可能性が出てきました。姫路市は古代播磨国の国府が置かれた場所ですが、早くから市街化が進んだこともあって、考古学的にはまだまだわからないことが多い地域です。今回の発見は、そうした播磨の古代を考える意味でも大きな鍵になるものと思われます。



唐三彩  
弁口瓶(上から、横から、拡大)



弁口瓶（復元）

苫編地区では古代の役所あるいは寺院関連の資料が見つかりましたがそれに対して、町坪地区では鎌倉時代の村の様子はかなりはっきりとわかってきました。

今回の調査で掘立柱建物跡が40棟近く見つかり、これまで見つかった建物跡は約80棟にのぼります。一つの宅地は2～3棟程度の掘立柱建物があつまったもので、これらは一ヵ所に集中するのではなく、複数の調査区に分散して見つかり、宅地が一定の間隔を置いて営まれた「散村」形態であったと考えられます。

また、幾つかの宅地では建物のすぐそばで墓が見つかり、中世には宅地を開発した人やその近親者の墓を宅地内あるいは宅地に接して作ることが知られており、これを「屋敷墓」と呼んでいます。平成17年度の調査でも見つかりましたが、今年度は3ヵ所で見つかりました。なかでも、17区で見つかった墓からは中国製の白磁碗が完全な形で見つかりました。



16区で見つかった掘立柱建物群

これが宅地の一つで、複数の建物からなり、何回か建て替えられています。



17区の土葬墓

白磁碗と土師器皿が供えられていました。長さ1.2m、幅0.7m程度と小さいものなので、子どもの墓かも知れません。



白磁碗

お墓に供えられていた白磁碗です。少し造りの粗いものですが、わざわざ輸入品をあがなっていることは間違いありません。

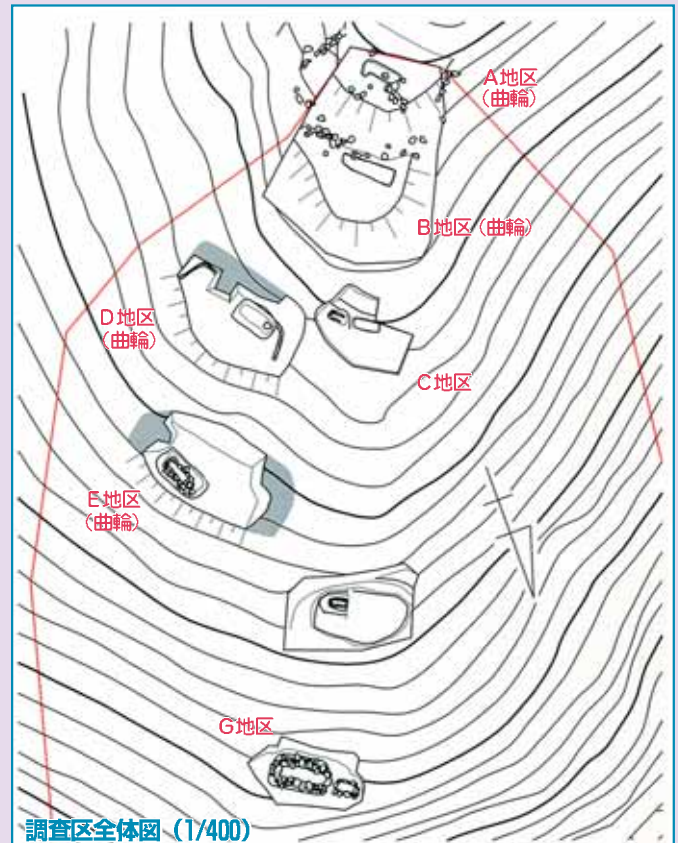




山崎城跡遠景（北側から）

養父市大谷の山崎城跡は国指定史跡八木城跡の東約2kmにある中世山城です。主郭の周囲に横堀を持つ発達した縄張りが見られ、大規模なものではないが、10数箇所の曲輪が、麓まで階段状に並ぶ構造をもっています。この山城の麓近くで農道の建設（中山間地域総合整備事業（広域連携型）レインボー南但地区）が計画され、今回発掘調査を行いました。

その結果、山城の曲輪4箇所とともに、5世紀代の古墳5基・竪穴式石室2基・小石棺3基が検出されました。



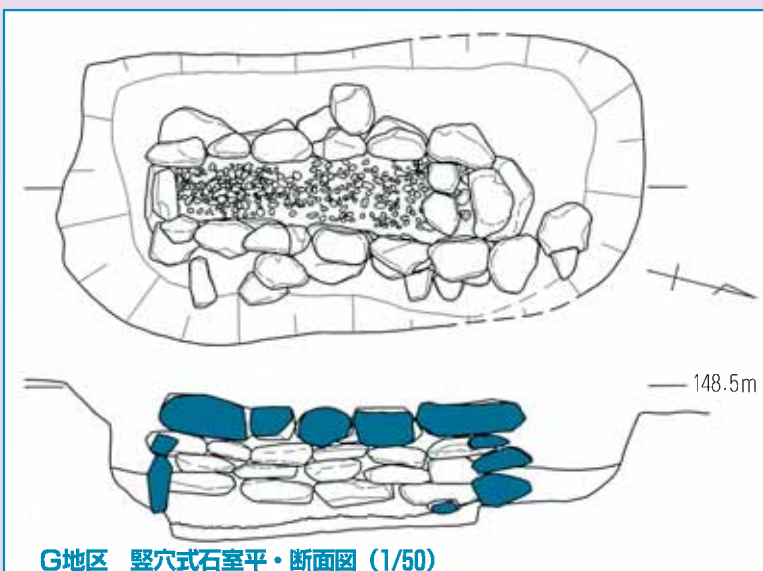
調査区全体図（1/400）



E地区 竪穴式石室（東から）



G地区 竪穴式石室（手前）・小石棺（東から）



G地区 竪穴式石室平・断面図（1/50）



E地区 竪穴式石室墓穴上から出土した須恵器コップ型土器（東から）



調査地は豊岡市市街地から奈佐川沿いに南西方向へ延びる谷筋を遡り、小河江集落の北側を東側へ入った支谷の中に位置しています。

検出された遺構は須恵器を焼成した窯体と焼成により生じた不良品や炭などが堆積した灰層などです。出土した須恵器から8世紀後半頃のものと考えられます。



↑ 窯跡は人里離れたこの谷の奥に位置しています。

◀ 窯は斜面の出っ張った部分に造られていました。



窯の本体は長さ4.5mで、風化した岩盤の地山を長細く逆U字型に掘り下げています。本来は粘土で作られた屋根が架けられていたと思われます。



↑ 窯の本体は地山の岩盤を掘り窪めて造られています。



↑ 窯の前には須恵器を焼いた時に生じた灰層が厚く堆積していました。



↑ 灰層の中からはこの窯で焼かれた須恵器がたくさん出土しました。



昨年度に引き続き、西脇北バイパス建設予定地で発掘調査を行いました。今回は全長約900mにもわたる寺内・西嶋・嶋地区の成果を紹介します。

川沿いに営まれた弥生時代の集落や古墳時代の粘土採掘坑、奈良時代から中世にかけての掘立柱建物や溝などが発見されました。弥生時代の集落では中期（2000年前）と末期（1800年前）の竪穴住居跡や溝が見つかり、土器が多く残されていました。特に末期の竪穴住居跡や溝では、丹波地方の特徴を持つ高杯が多く含まれていました。



右側の4点が、弥生時代末期の土器で下に紹介した竪穴住居跡から出土しました。他は昨年度寺内地区の粘土採掘坑から出土した古墳時代の土器です。

### ● 古墳時代中期の粘土採掘坑



粘土採掘坑群

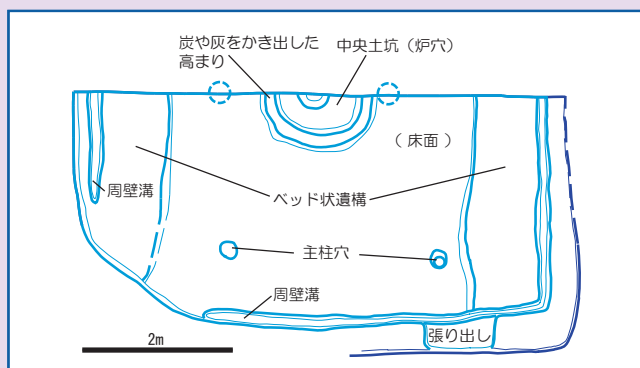


粘土採掘穴坑から出土した甕

直径80cm程度の穴が63基見つかりました。古墳時代中期(1600年前)に、谷の深い部分に堆積した粘土層をねらって土器を焼くために必要な粘土を掘り出しています。埋土の中に甕が入った穴もありました。

### ● 弥生時代末期の竪穴住居跡

長さ6.8mの長方形に近い多角形状の形をしています。床面の両端に7cmほど高まり（ベッド状遺構）があり、中央には炉穴と考えられる土坑や柱穴があります。床面とベッド状遺構をとり囲んで、周壁溝がめぐります。



弥生時代末期の  
竪穴住居跡



### ● 弥生時代中期の竪穴住居跡



検出状況



完掘した様子

直径6.4mの円形の住居跡です。壁はおろか床面までもが後世の削平をうけていました。4本の支柱穴と、中心に炉があります。かろうじて残っている周壁溝が二重に見えるのは、住居の拡張が行われているためです。



張り出し付近の土器







大門畑瀬遺跡遠景写真（北東から）

西脇北バイパス建設に伴って発掘調査した遺跡で、弥生時代中期からなら時代にかけての集落跡です。

弥生時代中期の環濠集落であることが判明しました。現在の加古川堤防の下に延びており、加古川本流の流れが変わったことがわかりました。

環濠は、幅4m前後で長さ40m余りを調査しました。環濠は一部切れており、そこに門跡と思われる1×2間の掘立柱建物跡が確認されました。石鍬や磨製石剣も出土しています。環濠底面に弥生土器が出土しており、その土器から中期後半の集落跡とわかります。



大門畑瀬遺跡空中写真（北西上空から）



SH04（西から）



SR01と柵跡（南東から）



## ● 川岸の遺跡

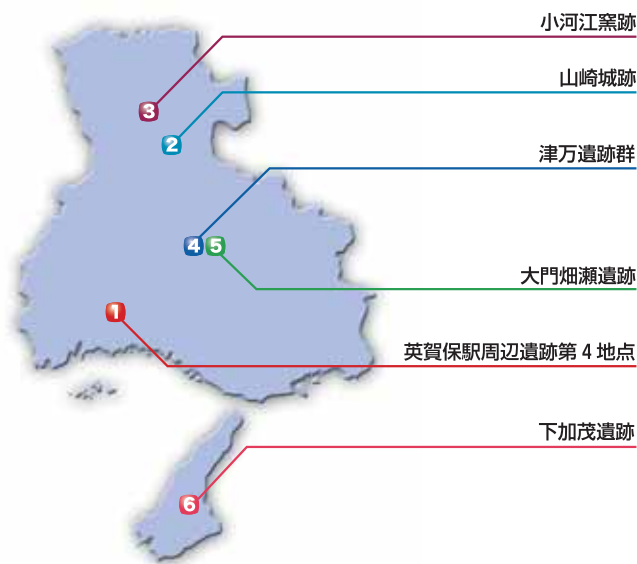
下加茂遺跡は平成15年度の調査によって弥生時代前期の水田や中期の周溝墓が発見された遺跡です。今回の調査ではその西側を流れる巽川沿いの地区を調査しました。

調査では弥生時代から中世にかけての古い巽川の流れを発見しました。特に中世の流れが大きく、遺跡周辺を洪水に巻き込んだようです。調査区には洪水による砂が厚く堆積していました。この洪水砂の下から中世や弥生時代の遺構を発見しました。川に近かった為か住居などの生活に密着した建物は見つかりませんでした。



調査の様子 手前が巽川の古い流れの跡

### 今回紹介した遺跡の位置



### ○ 編集後記とお知らせ ○

ひょうごの遺跡第66号をお届けします。平成19年度の主に上半期に発掘調査を実施した遺跡を紹介しています。次号で下半期の調査遺跡を報告する予定でいます。今年度は調査地区が比較的集中しています。但馬・播磨が多く他地区の調査は少なくなっています。

兵庫県立考古博物館ではふるさと発掘展を姫路市埋蔵文化財センターで3月30日まで開催しています。それに併せて考古学講座や遺跡見学会を行います。また、『倭国連合の成立と姫路地域の役割』と題して3月22日にシンポジウムも姫路労働会館で開催しますので、展示と併せてご参加下さい。



触れる・体感する、考古学のワンダーランド。

## 兵庫県立考古博物館

兵庫県加古郡播磨町大中500 TEL.079-437-5589  
http://www.hyogor.c.ed.jp/~kokohakurbo/

